

白米一俵御書

弘安三年

五九歳

白米一俵・^{毛芋}一俵^{一俵}・^{河海蒼}一籠^籠・^使御つかい^送をもってわざわざをくられて候。

人にも二つの^{たから}財あり。一には衣、二には食なり。経に云はく「有情は食に依って住す」と云云。文の心は、生ある者は衣と食とによって世にすむと申す心なり。魚は水にすむ、水を宅とす。木は地の上に^生をいて候、地を財とす。人は食によって生あり、食を財とす。いのちと申す物は一切の財の中に第一の財なり。^{へんまんさんぜんかいむ}遍満三千界無有直身^う命^うと^しと^かかれて、三千大千世界にみて候。財もいのちにはかへぬ事に候なり。さればいのちは^灯ともしびのごとし。食は^油あぶらのごとし。あぶら^尽つくれば^灯ともしび^消きへぬ。食なければいのち^命たへぬ。一切のかみ^神仏を^敬うやまいたてまつる始めの句には、南無と申す文字ををき候なり。南無と申すはいかなる事ぞと申すに、南無と申すは天然のことばにて候。漢土・日本には^{きみょう}帰命と申す。帰命と申すは我が命を仏に奉ると申す事なり。我が身には分に随ひて妻子・眷属・所領・金銀等もてる人々もあり、また財なき人々もあり。財あるも財なきも命と申す財にすぎて候財は候はず。さればいにしへの^古聖人賢人と申すは、命を仏にまいらせて仏にはなり候なり。

いわゆる雪山童子と申せし人は、身を鬼にまかせて八字をならへり。薬王菩薩と申せし人は、^{ひじ}臂をやいて法華経に奉る。我が朝にも聖徳太子と申せし人は、手の皮をはいで法華経をかき奉り、天智天皇と申せし国王は、無名^指指と申すゆびを^指たいて釈迦仏に奉る。此等は賢人聖人の事なれば我等は叶ひがたき事にて候。

たゞし仏になり候事は、凡夫は志ざしと申す文字を心へて仏になり候なり。志ざしと申すはなに事ぞと、^{いさい}委細にかんがへて候へば、^{かんじん}観心の法門なり。観心の法門と申すはなに事ぞと^何たづね候へば、たゞ一つきて候衣を法華経にまいらせ候が、身のか^皮わをはぐにて候ぞ。うへたるよに、これは^離なしては、^{今日}けうの命をつぐべき物もなきに、たゞひとつ候^御これ^料うを仏にまいらせ候が、身命を仏にまいらせ候にて候ぞ。これは薬王の^臂ひぢをやき、雪山童子の身を鬼にたびて候にも^劣あいをとらぬ功德にて候へば、聖人の御ためには^{じく}事^養供やう、凡夫のためには^り理^供くやう、止観の第七の観心の檀は^{波羅}蜜と申す法門なり。まことのみちは世間の事法にて候。金光明経には「若し深く世法を識れば即ち^{これ}是仏法なり」と^{これ}と^かかれ、涅槃経には「一切世間の外道の経書は皆是^{これ}仏説にして外道の説に非ず」と仰せられて候を、妙楽大師法華経の第六の巻の「一切世間の治生産業は皆^{あい}実相と^{はい}相違背せず」の経文に引き合はせて心をあらわされて候には、^{かれがれ}彼々の二経は^浅深心の経々なれども、彼の経々は^浅いまだ心あさくして法華経に及ばざれば、世間の法を仏法に依せてしらせて候。法華経は^然しからず。やがて世間の法が仏法の全体と^た積せられて候。爾前の経々の心は、心より万法を生ず。譬へば心は大地のごとし草木は万法のごとしと申す。法華経はしからず。心すなはち大地、大地則ち草木なり。爾前の経々の心は、心のすむは月のごとし、心のきよきは花のごとし、法華経はしからず。月こそ心よ、花こそ心よと申す法門なり。此をもってしろしめせ。白米は白米にはあらず。すなはち命なり。